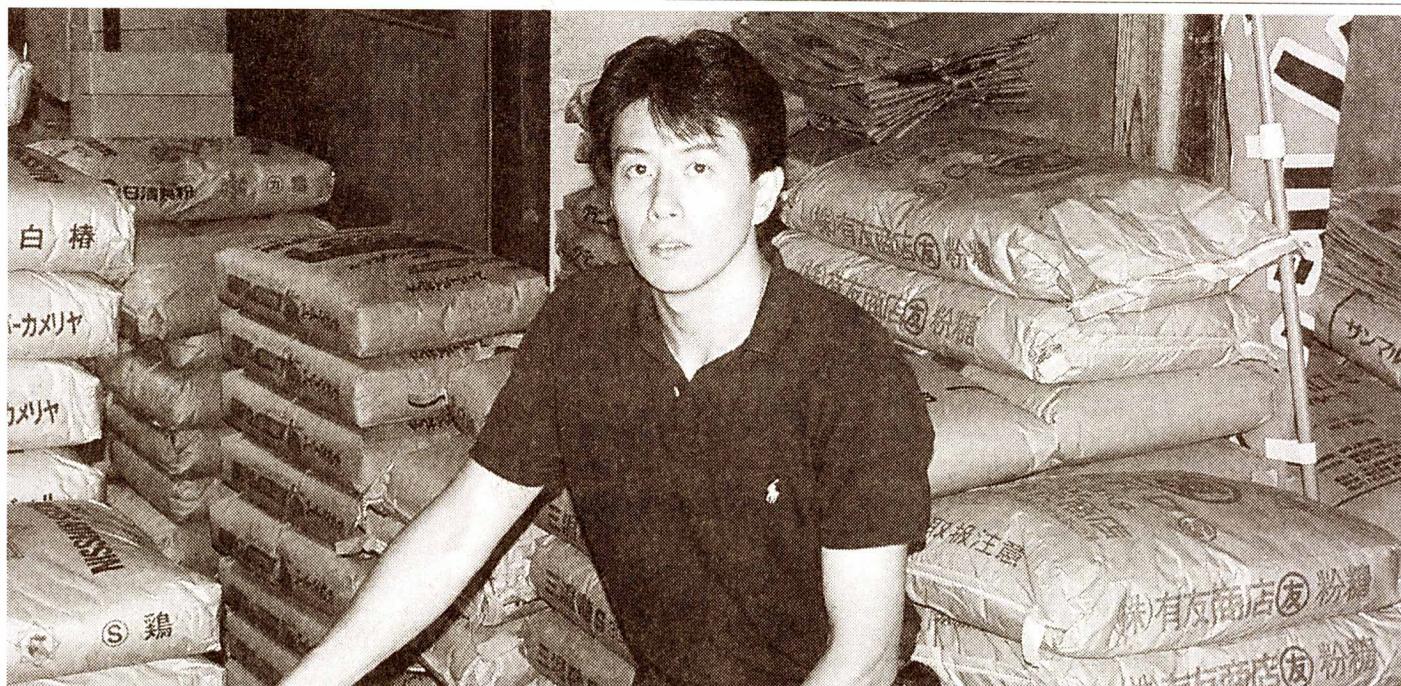


中島 基晴



福山市の鞆の浦に伝わる保命酒は江戸時代、福山藩の御用酒として諸侯に献上され、全国に名をとどろかせた名品だった。中島商店（同市御船町1丁目）専務の中島基晴（39）は、その保命酒を再び全国区にすることに情熱を傾ける

「仕掛け人」だ。

昨春、静岡県下田市であった黒船祭。盟友である醸造元・岡本亀太郎本店専務の岡本良知（37）とともに、保命酒を手に駆けつけた。祭に招待されていたペリー提督の子孫に、日米和親条約締結時の宴席で振る舞われたとされる保命酒を「献上」するためだ。狙い通り話題となり、試飲した参加者の評判も上々だった。この春には、下田の酒屋が独自のラベルで保命酒の販売を始めた。

中島商店は明治42（1909）年から3代続くしにせの食料品卸問屋だ。長男の中島は慶應大学商学部を卒業後、伊藤忠商事に入社。東京本社の食料部門で3年間、砂糖やコーヒー豆を専門に扱った。93年、異業種採用を進めていた。中島は「福山だけで自己完結でいる時代じゃあない」という。「何もしなければ何も変わらない。せっかくふるさとに戻ったのだから、福山を大いに盛り上げたい」。「自慢の種」はまだたくさんの眠っているはずだ。（敬称略）

特産品で全国区狙う

いた慶應大職員に誘われて転職。4年後、30歳を機に地元に戻った。

4代目を継ぐことは学生時代から決めていた。100年近く歴史の重みを背負わねばという義務感と、自分の力で発展させたいという夢があった。

食料品卸問屋を取り巻く状況は厳しい。商社時代、同業者の倒産を嫌というほど見てきた。備後地区はとりわけ価格競争が激しく、各社とも生き残りに必死だ。地方にも大手商社が進出する中、価格では太刀打ちできない。修業のつもりで配達、経理から仕事を始めた中島は、取扱商品を増やす一方、「すき間」を狙う新商品開発にも乗り出した。

保命酒の販売もそんな戦略の一環だが、「備後、しまなみをアピールし、名刺代わりになる特産品をつくりたい」という思いの方が大きい。東京で故郷の知名度の低さに何度も悔しさをかみしめてきたためだ。

いまはもうけは度外視。仕事の合間に試作を繰り返して地元業者に持ち込み、共同で商品化を進めってきた。保命酒関連商品はアイス、羊羹など14種類に膨らみ、協力者も増えつづある。中島は「福山だけで自己完結できることない時代じゃあない」という。何もしなければ何も変わらない。せっかくふるさとに戻ったのだから、福山を大いに盛り上げたい」。「自慢の種」はまだたくさんの眠っているはずだ。（敬称略）